

# 今、いちばん気になる統計は？

## 国際商品市況(CRB指数)

昨年末、米国は9年半ぶりに利上げを実施し、金融政策の「正常化」に向けた一歩を踏み出しました。今後の利上げのペースについては、依然不透明な展開が予想されます。他方、先進国による量的金融政策などで世界的なマネーはかつてない規模にあり、金融市場の動揺が世界経済に与える影響は計り知れません。

その場合、経常赤字を抱えるなど経済活動を海外資金に依存せざるを得ない新興国や資源国が最も影響を受けると考えられます。このような中、一昨年以降の原油をはじめとする国際商品市況の調整で、一部の新興国では経常収支や財政収支の改善がみられます。ただし、多くの資源国では経常収支も財政収支も悪化に歯止めが掛からない状況に陥っています。

昨年は原油のみならず、穀物などあらゆる商品市況が低迷し、資源国経済は軒並み低調な推移をみせました。今年は異常気象も予想されるなか、「資源国」と一括りに出来ない状況となることも考えられます。

(経済調査部 西濱 徹)

## 資料 CRB指数の推移



(出所) THOMSON REUTERSより第一生命経済研究所作成

## 編集後記

前回、この欄で「2016年は十二支では申年。マーケットでは…未は辛抱、申酉騒ぐ…と言われる年である」と書いたばかりであるが、今年は大発会から波乱の展開だ。年末にかけて上げ過ぎた分の利食いと達観してもらえない材料ばかりであり悩ましいスタートとなった。

12月、FRBが9年半ぶり、2013/5のバーナンキショックから2年半かかってようやく利上げを実施、市場も落ち着いて受け止めておりいち早くQEからの脱却をひとまず成功させた。一方、ECB、日銀は追加の緩和、緩和の補完措置を決定したものの市場の反応は、「あれっ…こんなもの?」とこれまでの総裁の発言からサプライズを期待していたのかネガティブなものが多かった。

期待に働きかけ行動を変えさせるためにはサプライズが必要であり「出来ることはなんでもやる」と言うのは正しいと思う。しかし「市場との対話」という観点ではサプライズは効果は大きいですが、一歩間違えればボラティリティ急上昇、市場混乱を引き起こすものであり何度も使えるものではない。今年、日銀の量的・質的金融緩和は4年目に入る。市場との対話の深化に期待したい。(H.S)

○第一生命経済研レポートに関するご意見・ご要望は、keizai@dlri.dai-ichi-life.co.jpまでお寄せ下さい。

○本資料は情報提供を目的として作成されたものであり、投資勧誘を目的としたものではありません。作成時点で、第一生命経済研究所経済調査部が信ずるに足ると判断した情報に基づき作成していますが、その正確性、完全性に対する責任は負いません。見直しは予告なく変更されることがあります。また、記載された内容は、第一生命ないしはその関連会社の投資方針と常に整合的であるとは限りません。